青少年ゆざわ

青少年育成湯沢市民会議　令和５年３月１日発行

令和４年度 青少年育成湯沢市民大会

11月16日（水）稲川中学校体育館において、湯沢市教育委員会共催、湯沢秋田ライオンズクラブ、雄勝小野小町ライオンズクラブ、稲川ライオンズクラブの協賛により、令和４年度青少年育成湯沢市民大会が開催された。

今回も、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、大会関係者のみによる開催を余儀なくされたが、湯沢市雄勝郡内の各中学校の代表は、稲川中学校生徒等が見守る中、堂々と意見発表を行った。

意見発表

私を変えてくれたこと

湯沢南中学校　３年
佐藤（さとう）　愛結（まゆ）

いつも当たり前のように繰り返される「出会い」。それは私たちの日常にあまりにも身近すぎて、強く意識されるものではないかもしれません。しかし、人と人との出会いによって私たちは成長し、大切なものを学ぶのではないでしょうか。

私は山田小学校の卒業を機に、湯沢南中学校に入学しました。中学校に入学して初めて出会う人がほとんどで、期待よりも不安が大きかったことを覚えています。南中は人数が多い分、いろいろな意見や考えをもつ人がいます。折り合いをつけることが難しいときも多くあり、小学校のときのようにはいきませんでした。

そんなとき、私の心の支えとなっている小学校からの友人の姿が思い浮かびました。その子は買い物に行くと、自分の欲しいものには目もくれず、いつも友達や家族が喜びそうなものを選んでいるような、周囲を思いやることができる子でした。私は、その友人の姿を思い出し、自分は周りのことを考えずに発言することがたくさんあったと気がつきました。それからは思ったことをすぐ口にせず、相手の立場や気

持ちに立って考える努力をしました。また、相手の考えをいったん受け入れて、それから自分の考えを伝えることを意識しました。「出会い」が自分を変えてくれているのだと、初めて実感したのはこのときです。

進学先の南中でも素敵な出会いがたくさんありました。その中でも一番心に残っているのは、入部したバスケットボール部の先輩方との出会いです。その先輩方はバスケがとても上手だったのですが、私が驚いたのは先輩方の普段の生活の様子でした。困っている人がいたら、必ず声をかける。集会があれば、必ず全員が挙手をして発言をする。落ちているごみを自然に拾って、ごみ箱に捨てている場面も何度も見ました。監督の先生の「女バスのプライドをもって生活しなさい」という言葉を、先輩方はいつも実践していました。また、当たり前のことを当たり前に行い、いつでも優しく礼儀正しく、正に正義の集団でした。私は、そんな先輩方の姿にあこがれ、私もそうありたいと思うようになりました。普段の生活とバスケのプレーはあまり関係のないものだと思っていましたが、それは全くの間違いでした。普段の生活と部活動は強くつながっていて、人として成長するためには、そのどちらも手を抜いてはいけない。そのことに気づかせてくれた先輩方との出会いには感謝しかありません。

また、素晴らしい先生との出会いも私を変えてくれました。今、私には英語の教師になりたいという夢があります。私が、その夢をもつきっかけとなったその先生は、私の相談を優しく聞いてくださり、前を向けるようなアドバイスをいつもしてくださいました。悩みに寄り添い、同じ目線で接することのできる人に私もなりたい。それが今、私の将来の夢に向かって努力する原動力になっています。

当たり前のように繰り返される出会い。今の私があるのは、たくさんの人との出会いがあったからです。人は出会いによって成長していくと、今、私は強く感じています。身近にある「出会い」の貴重さや大切さに気づき、自分も成長しようとする姿勢が大事だと思います。

皆さんの周りにも、宝物のような出会いがたくさんあると思います。もう一度、その宝物の大切さに目を向けてみませんか。きっとそこには、自分を成長させ、人生を豊かに、そして幸せにしてくれるヒントがあるはずです。

よい未来へ向かって

山田中学校　3年　富谷（とみや）　優菜（ゆうな）

山田中学校では、去年から、「SDGs」の活動に取り組んでいます。「SDGs」とは、国連の持続可能な開発目標のことで、２０３０年までに解決させるべき17の課題をまとめたものです。

私は、その中から、13番目の「気候変動に具体的な対策を」を選びました。気候変動と聞いて最初に思い浮かんだのは、今、問題となっている地球温暖化のことです。温暖化を食い止めるには、植物が有効ですが、私が住んでいる山田は、自然豊かな地域なので、「何かできるかもしれない」と考えました。それが選んだ理由です。

そこで、私は、温暖化について、湯沢市役所に取材に行きました。そこで分かったことは、「地球温暖化は完全には止められない。一人一人が気を付けないと抑えることが難しい」ということです。その話を聞き、少しでも温暖化を抑えるためには、どうしたらよいのだろうかと考えました。そんなとき、湯沢市で「ゼロカーボン宣言」が出されました。ゼロカーボンとは、二酸化炭素をなくし、持続可能な社会を自分たちの手で創り上げていくことです。

では、ゼロカーボン実現のために、私たちができることは何なのでしょう。そう考えたとき、一番最初に「リサイクル」が浮かびました。リサイクルをしたら、ゴミを燃やす量が減り、排出される二酸化炭素の量が減少されるのではないでしょうか。

そう思い、私たちが考えて実行したことは、「山中でフリーマーケットを開催し、各自がいらない物を集めて売る」ということです。そうすることで、捨てる物が減り、少しでも二酸化炭素の排出を抑えることができるはずです。早速、フリーマーケットを学校で行う「夏祭り」を計画することにしました。

湯沢市で、ゼロカーボン宣言が出された今、地球温暖化は年々深刻さを増しているということだと思います。これは、市民一人一人が自分のこととして捉え、行動しなければ抑えることができないでしょう。山田、湯沢市、秋田県というように範囲を少しずつ広げて、協力してやっていくことが大切なのではないでしょうか。

地球温暖化を抑えるために、私たちにできることはリサイクルの他にもたくさんあると思います。例えば、「節電」です。以前、東京で大きな停電がありました。私は、そのニュースを見てから、以前よりもっと節電を心がけるようになりました。節電をすることで、消費する電気の量を減らすことができます。そして、さらに、太陽光発電や地熱発電など、再生可能エネルギーの使用を意識することで地球温暖化防止になるはずです。これは「持続可能な社会」につながるのです。

これらの考えをまとめると、リサイクルやゼロカーボン、節電などは、「持続可能な社会の実現」につながることが分かります。一人の力は小さいかもしれませんが、みんなが意識を高めることにより、社会のよりよい循環を守り、地球温暖化を抑えることができるのではないでしょうか。

地球温暖化を止めることは難しいことかもしれません。だからこそ、今、すべての人が力を合わせ、起こりうる未来に向けて行動することが大切なのです。さあ、力を合わせてできることから行動していきましょう。

ひと言で変わる

雄勝中学校　1年　高山（たかやま）　珠愛（みお）

「8．9％」

皆さんは何の数字だと思いますか？

これは今年5月に総務省が公表した「インターネット上での誹謗中傷に関するアンケート」の結果です。15歳から99歳まで2000人にアンケートを実施し、被害経験があると答えた人の割合です。さらに、ネットに親しむ若い世代では、20歳代が16・4％でもっとも多く、15歳から19歳までが10・9％となっています。この数字を聞いてどのように感じたでしょうか。

また、みなさんは悪口や陰口を言われ、傷付いたことはありませんか？

私は経験があります。そのことをずっと悩んでいた時期がありました。

そんな中、私たちのクラスでは、「ふわふわ言葉」と「チクチク言葉」について考えました。はじめは先生に言われ、それぞれが言われてうれしい言葉や傷つく言葉を紙に書いて、教室に掲示しました。時間をおいて見返すと、日常生活で自分自身も、周りの人も深く考えずに言っているものばかりでした。そんな何気ない一言で、人は傷ついているのだと、はっとさせられました。

さらに、最近、ネットでの「誹謗中傷」のニュースを目にすることが多くなっていると私は感じます。ネットへの書き込みは匿名性が高く、相手の顔が見えないために、つい軽い気持ちで書いてしまっているのでしょう。さすがに、これは自分には直接関係ないと思っていました。つい最近までは……。

けれどある日、身近なところでSNSを使ったトラブルが起きてしまいました。そのときは「まさか」という気持ちでいっぱいでした。私は幼いころから今まで、「いじめは絶対にしてはいけない」と何度も聞かされてきました。それなのに、こんなことが起きてしまったのです。

今、私たちが利用しているコミュニケーションアプリは、会話をしているような気軽な気持ちでやりとりができ、とても便利です。その反面、顔を合わせての会話と違うことも、私たちは知っておく必要があります。

まず、表情が見えないために、どのような口調でその言葉を発信しているのかがわからないのです。また、文字として残ってしまうために、ひどい言葉を送受信すると、何度でも目についてしまいます。今回トラブルになった内容にもたくさんのチクチク言葉がありました。当事者となった本人たちの悲しみや苦しみは、すぐにはなくならなかったと思います。同じグループでやりとりを見ていた私も、何かできることはなかったのか、今でも後味が悪いままです。

この出来事があってから、悪ふざけでネットに友達の悪口を書く人や、本人の知らないところで、陰口を言う人を絶対に許せないという気持ちが強くなりました。

世の中には、誹謗中傷に苦しみ、自ら命を絶ってしまった方もいます。どうにかして、このように苦しんだり、辛い思いをしたりしている人を減らすことはできないものでしょうか。

日本では今、誹謗中傷に対して罰則を強化しようという動きが活発になってきています。そのような社会の状況をしっかりと知ること。これが現状を変えていく第一歩になると思います。そして、何より、言葉を発信する一人一人がひと言の重みを知り、この社会を変えようとする意志が解決への道しるべになると信じています。

「ひと言で変える」

誰もが明るく楽しく暮らしていける未来を目指して、私は一歩を踏み出します。

未来へのステップ

東成瀬中学校　3年
谷藤（たにふじ）　日菜（ひな）

明日が閉ざされる――二年前に世界中に広がった新型コロナウイルスは、大勢の人に大きな影響を与えました。

世界各国で感染拡大防止のための対策が行われました。しかし、それと同時に、色々な問題も発生しました。医療問題、経済――新型コロナウイルスによって、これまでの私たちの生活や価値観は一変しました。そして、新型コロナウイルスは、私たち、中学生にも大きな影響を与えました。

二年前、私は中学校への入学をとても楽しみにしていました。それというのも、小中連携で見てきた中学校の先輩方はみんな輝いて見えたからです。私もあんな中学生になりたい――東中生の先輩方は私の憧れでした。

しかし、現実は違っていました。コロナ禍により、私の中学校生活は、スタートから不安を感じることばかりでした。

例えば、感染拡大防止のための休校措置です。中学校に入学した後の休校は、新入生の私には、不安だらけの中学校生活のスタートとなりました。

中でも一番ショックだったのが、部活動です。二年前、コロナの影響で全県総体がなくなりました。三年間の集大成である全県大会がなくなり、先輩方はどんなに悔しかったでしょう。しかし、部活動の制約は未だに続いています。そうした事を含め、私は自分の中学校生活に対し、不完全燃焼な思いを抱えていました。

なぜ自分たちの時だけ、このようなひどい目に遭わなければいけないのでしょう。義務教育最後の年にも、勉強や部活動に完全燃焼できない環境に、私はいらだちを覚えました。

明日が閉ざされる――私は、新型コロナウイルスに対してそう感じました。これまで「当たり前」に感じていた明日の存在が、自分の力ではどうにもならないことがあることを、私は知りました。

しかし、それと同時に、私は「当たり前」についても考えるようになりました。

健康でいられることの幸せ、学校でみんなと一緒に勉強できる幸せ、部活動を思いっきりできる幸せ、家族で温かいご飯を食べることができる幸せ――今まで「当たり前」と思っていたことは、大勢の人の協力によって成り立っていたことに私は気がつきました。また、それと同時に、自分は今まで「明日」という存在に頼りすぎていたのではないか、とも思いました。

「今日」という一日は「今日」しかありません。だからこそ、精一杯自分のやるべきことを実行していかなければいけない、と私は思います。そう考

えると、新型コロナウイルスは私にこれからの生活に対する意識を変えるきっかけになったともいえます。

新型コロナウイルスの収束については、残念ながらまだ先が見えない状態です。それは、十年以上かかるとも言われています。

十年後――私たち中学生は、社会に出て、みんなの生活を支える側になっています。誰もが経験したことがないこの状況を、私たちは、模索しながら前進していかなければいけません。

私は今の生活をどう過ごすべきかを考えるようになりました。そして、将来、医療関係の職業に就くことを決心しました。新型コロナウイルスで苦しむ人を一人でも多く助けたい、と思ったからです。

しかし、思うだけでは自分の夢を達成することはできません。だから、これからは自分の目標を実現するために、勉強を頑張っていきたいと思います。

未来へのステップ――明日へ踏み出す鍵は、みなさんの心の中にあります。未来に向かってみんなでステップを踏み出し、明るい未来をみんなで作りましょう。

私たちなら、きっとできます。

性別の壁を越えて

皆瀬中学校　3年
佐藤（さとう）　菜幸（なゆき）

男性は男性らしくしなさい。女性は女性らしくしなさい。このような考え方が、世の中にはまだ残っていると思います。なぜ、男性は男性らしく、女性は女性らしくしなければならないのでしょう。そもそも、男性らしさ、女性らしさとは何なのでしょう。皆さんは、考えたことがありますか。

以前の私は、男性は男性、女性は女性として分ける考え方を正しいと思っていました。一部の人は、心の性別が体の性別と違い、悩んでいると知っていながらも、その性別で生まれてきたという事実が変わる訳ではないのだから、仕方がないと思っていました。そんな時、私に新しく友達ができました。その友達は、女の子です。でも、女の子というのは、戸籍上の性別です。その子は心の性別が男の子だったのです。それを知ったのは、仲良くなって約一ヶ月後のことでした。その子が心の性別に悩んでいる事を私に打ち明けてくれた時、その最初の言葉は、

「気持ち悪いと思ったらごめんね。」

でした。その一言で、私はすごく切なくなりました。同時に、今まで心の性別なんてどうでもいいと思っていた事を、すごく後悔しました。私は問題視していなくても、それによって苦しい思いをしている人はたくさんいると知りました。その友達がＳＮＳで私に大事なことを伝えてくれた時、何度も入力中の表記が付いたり消えたりしていました。きっと、何と文にしようか、本当に打ち明けるのか、すごく悩んだのだと思いました。私はこれがきっかけで、男だから、女だからと偏見をもたないように気を付けるようになりました。

ですが、過去の私のように、男性は男性、女性は女性、という考え方の人は、まだたくさんいると思います。男女差別に苦しむ人がたくさんいるのに、なぜ世の中からそんな考え方がなくならないのでしょうか。それは、「差別」と「区別」の違いが難しいからではないでしょうか。例えば、トイレの表札です。女性はスカートをはいている赤色の札。男性はズボンをはいている青や黒の札。私はこのようなマークを思い浮かべます。でも最近は、これが廃止されている所もいくつかあるそうです。しかし、私は反対です。なぜならこれは「区別」だと思うからです。この場合は、男女で分けないとパッと見て分からず、困る事が増えると思います。それに表札を直したところで、トイレ自体は結局男女で分けられるから、あまり関係がないと思います。しかし一方で、女性の表札のデザインが赤である事や、スカートをはいている事は、私たちの一方的なイメージによってつけられた偏見の一つであるともとらえられます。このように、一つの例をとっても、「差別」なのか「区別」なのか、考え方が分かれることがあるのではないでしょうか。「差別」「区別」のとらえ方は人それぞれで異なってしまうことが、この問題の難しさだと私は思います。男女差別を廃止しようとしても、「区別」だと言う人もいるし、反対に、「区別」だから仕方がないと思っていても「差別」だと感じる人もいるでしょう。世の中から男女差別が完全に消える日はまだまだ遠いかもしれません。

しかし、私の友達のように、戸籍上の性別と心の性別の不一致で悩んでいる人がいるのも現実です。だからこそ性別にとらわれない、優しい世の中になればいいと私は思います。男女のイメージだけで発言をしないこと。性別に悩む人を貶（おとし）めたり、ばかにしたりしないこと。つまり、多様な人がいて、多様な考え方があるということを互いに理解し合うことが何よりも大切なのです。それが当然のように皆でできたら、今よりもっと素敵な世の中になると私は信じています。互いに助け、支え合いながら、皆で性別の壁を越えていきませんか。

自分の心に問いかけて

稲川中学校　3年
藤原（ふじわら）　舞空（まいら）

みなさんがタイムマシンに乗るとしたら、過去に行きたいですか？未来に行きたいですか？簡単そうに見えて、悩ましい質問ですよね。

ところで皆さん。たった今、自問自答、つまり自分の心に問いかけ、答えを出す作業をしてくださった方が多いのではないでしょうか。今日は、私があることをきっかけに、自問自答をした話をします。

私には、戦争を経験し、生きて帰ってきた曾祖父がいました。私が２歳の時に、曾祖父は93歳でこの世を去ってしまいました。今年、１００歳になった曾祖母もいます。１００歳ですので、

直近のことはすぐに忘れてしまいます。しかし、何回聴いても一語一句変わらずに語ってくれることがありました。

戦争についてです。

私の曾祖父が経験した戦争は、授業で習った戦時下の人々の暮らしよりもずっと生々しいものでした。食糧がない当時、必死に命をつなぐためにネズミやヘビを食べ、生き延びたこと。戦場では、1日に1食、2食ほどしか食べられなかったことを教えてくれました。

そして、曾祖父が1冊の本を残してくれていました。この本には、戦争から生きて帰ってきた人の戦場の記録が書かれていました。もし、私が当時を生きていたら、生きることを諦めたくなっていたかもしれません。正直、「今って、まだいいな」なんて思ってしまいました。

そんなとき、最初にお話した、自問自答が始まったのです。

今って、本当に過去より「いい」なんて言えるのかな。

そもそも、なぜ戦争が起こるの？

意見が対立して、互いの意見を押しつけ合うからだ。

そうか、だから、「相手の立場になって考えること」って大切なのかもしれない。

でも人間って結局自分が1番じゃない？そんな人間が、相手の立場になって、考えることなんてできるのかな。

よく、「過去から学べ」と言いますが、私たちは、いつも未来のことばかり気になってしまう。たしかに、私だって受検のことや進路のことが気になって仕方ない。そうすると、私の曾祖父や曾祖母が生きた過去って……。必死に生きたあの時間は……。あれ、こんなに深く考えなくても私は、生きていけるはずなのに、なんでここまで考えたのだろう。

結局、自問ばかりで答えはほとんどでませんでした。

しかし、ひとつだけ分かったことがあります。それは、こうして自分の心に問いかける過程で、学校の授業で学んだことや曾祖父たちの言葉、15歳の私の感性を働かせて考えたこのこと自体が、なんだか「価値あること」に思えてくるのです。

中学生になり、建前を並べられるようになりました。少し悔しいですが、これは、社会で生きていく上で必要な力です。しかし、こうして、曾祖父たちの戦争の話を通して、共感し、「他者の言葉に心を寄せてみようとすることとって、こういうことなんだ」と改めて実感できました。自問自答は、答えを出すためのものでもあり、時代や場所を越えて人の心に寄り添う時間にもなるんだ。そう実感できたのです。

自問自答は苦しいです。常に自分を問い詰める苦しさがあります。答えがでないときは、いつだってぐちゃぐちゃした気持ちになります。でも、ぐちゃぐちゃしながらもいろんな人の事を考えたと思えば、ほんの少し温かい気持ちにもなれます。皆さんは、どうでしょうか。

自問自答って、案外悪くない。苦しいけれど、悪くない。いろんな人のことを思い出して、自分の学んだことや感性を生かせる時間なのですから。

自分らしく生きるための社会へ

羽後中学校　3年
菅原（すがわら）　希（のぞみ）

みなさんは、「LGBT」について知っていますか。LGBTとは、同性を好きになったり男女どちらも好きになったり、体の性とこころの性があっていないと考えたりする人のことを言います。私は、LGBTのことを初めて知ったとき、「同性を好きになるなんて気持ち悪い。今の性別とは違う性別になるのはおかしい。」とあまりいいイメージをもちませんでした。しかし、そんな風に思っていた自分を変えるきっかけがありました。

以前テレビで、LGBTの特集が放映されました。内容は、男の子が女の子に性別を変えるというものでした。その男の子は、昔からおままごとや人形遊びなど、普通だったら女の子が遊ぶようなもので遊んでいました。男の子は女の子と一緒にいるのが日常になりました。月日が経ち、男の子は中学生になりました。中学校には、制服を着る、というルールがあります。もちろん男の子は男の子用の制服を着ることになります。男の子はそのことに対して不満をもちました。その様子を見て、両親は男の子の異変に気付き始めます。でも責めることはしませんでした。それは周りの子たちも一緒で、いじめたり、からかったりせず、その子のことを受け入れ、一緒にスカートやコスメなどの女の子が使うようなものを買いに行ってあげるなどしました。男の子の周りは優しい人であふれています。

私は、この番組を観たとき、今まで「気持ち悪い」と思ったり、「おかしい」と思ったりしていたことの方が、おかしいことなのだと気付きました。私の周りにも女性だけれど髪の毛を短髪にしたり、それとは逆に男性が髪を長くしたりしている人もいます。そのような人たちも一つの個性と捉え、それを奇異な目で見るのではなく、理解しようとすることも必要なのではないでしょうか。

現在の社会は多様性が求められています。昔はよく「女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしくしなさい」と言われていました。しかし、それは間違っていると思います。世の中には、テレビで観た男の子のような人たちもたくさんいます。そんな人たちがより暮らしやすい世の中になっていくことが求められているのではないでしょうか。

今、女子の制服でも、スカートとズボンを選べる学校が増えてきています。このことからも、性別にとらわれずに自分の着たい制服を着ることができ、性別に縛られることなく、自由に生活することができます。またランドセルの色も同じように、現在では様々な色が選択できるようになっています。私が小学生の時も、女の子で黒色のランドセルを使っている子がいました。たぶん男の子は黒や青、女の子は赤やピンクといったイメージがあるかもしれませんが、そのイメージは捨て、男女

関係なく好きな色や好きな服、好きな髪型ができるといいと思います。

ＬＧＢＴについて、私が今できることは、そのような状況にある人のことをよく知ること、最後まで相手の話を聞くこと、話してくれたら、それを温かく受け入れ、それに対して感謝の気持ちを伝えること、相手の考えや状況を勝手に決めつけないことなどたくさんあります。それは、ＬＧＢＴの問題に関わらず、人が自分らしく生きることを保障される社会の在り方につながっていくように思います。

ＬＧＢＴを初めて知ったときは、正直あまりよい印象はもてませんでした。世の中を見ても、ＬＧＢＴのような人たちが全て受け入れられるわけではないと思います。しかし、私は、様々な立場や状況にある人に寄り添い、自分が、理解者、支援者であることを、目に見える形で行動できるようになりたいと思います。これからは、男女関係なく、広い心で、みんなが暮らしやすい社会になっていくことを願っています。

ピース

湯沢北中学校　3年
新妻（にいつま）　紅葉（くれは）

「みんなちがってみんないい」

この言葉を聞いて、皆さんはどんなことを想像しますか。人それぞれ考え方は違うと思います。一人一人趣味やセンスなどは異なっていても、さまざまなよさがあることを想像する人もいるでしょう。私は、この言葉を耳にするたびに、兄の姿が頭の中に浮かびます。

私には21歳の兄がいます。兄は「自閉症」という障がいをもっています。自閉症の主な特徴は、コミュニケーションをとるのが難しいことなので、自分の気持ちをうまく伝えられません。しかし、兄は私たち健常者と同じように保育園に通い、支援学校でしたが、小中高を卒業し、今まで毎日元気に過ごしてきました。兄が充実した日々を送れているのは、家族の存在はもちろん、保育園や支援学校など、兄のことを、そばでサポートしてくださった方々のおかげだと思います。兄が通っていた学校では、私の学校と同じように、体育祭や文化祭などの行事がありました。兄の学校行事は、毎回家族全員で見に行っていました。「障がいをもっていても、一つ一つのことをしっかりこなして、無事にやり遂げられるのか。」それがとても心配でした。しかし、体育祭では先生が兄の隣や後ろで一緒に走ってくださったり、文化祭の劇や演奏では遠くから見守ってくださったりしている姿を見て、私はとても感動しました。また、兄が年に何回か通っていた病院での作業療法では、作業療法士の方の手助けで、できなかったことがどんどんできるようになりました。このような姿から私は「兄のように不自由な人たちでも、私たち健常者が支えることで、お互いに成長できるんだな。」と思うようになったのです。

その反面、障がいをもっている人に対しての偏見も感じることがありました。私が小学校のころには、友達と家の中で遊ぶことが多かったのですが、数人は兄の姿をみると「怖い。」「やっぱり外で遊ぼうよ。」と言ってきたのを今でも覚えています。友達に悪気は無かったかもしれません。でも、私はその人たちの言葉が不思議でした。「兄の何がいやなんだろう。」と。兄は、手を差し伸べてもらえたらできることがたくさんあるのに、見た目だけで判断され、寂しく思いました。もちろん、友達の中には兄のことを自然に受け入れてくれる人もいました。

障がい者に対する考え方はきっといろいろあるでしょう。私は障がいをもった人たちが政治に参加している動画を見たことがあります。私はそれを見て、「すごい。」と感じたのですが、その動画のコメント欄を見ていると、私と同じ意見の人ばかりではありませんでした。「こんな人たちに何ができるの」「この人たちには任せられない」。そんなコメントも目に入りました。

でも、本当に障がいをもった人たちは何もできないのでしょうか。何も変えられないのでしょうか。少なくとも私は、兄の姿を見て、知っています。兄は周りの人のサポートがあって成長できました。兄を見た目で判断せずに支える人が集まり、小さな力が大きな力へと変化していったことを私は知っています。兄がいることで、私の家族は強く、優しくなれました。

「みんなちがってみんないい」

一人一人の違いは「差」ではなく、パズルのピースのようなもの、と私は考えます。生きることは、パズルのようにお互いのすき間を埋めていき、一つの大きな作品を作り上げていくことに似ていると思います。互いの違いがきっかけとなり、それを補おうとする優しさが生まれる。そして、それを支えようと、他の誰かが手を差し伸べる。一つ一つのピースの形の違いを多様性と捉え、それぞれができること、できないことを補い合って、大きな力になると私は信じています。

そして、困っている人を助けようとする「正義のピース」と、その優しさに支えられるピースがつながり、新たなピース（平和）が生まれる。私は、そんな世の中が永遠に続くことをずっと願っています。

◇青少年ゆざわ編集委員会
委員長　柿崎　清
副委員長　高橋　政介
委員　髙嶋江美子
　　草嶺　芳哉
◇発行
青少年育成湯沢市民会議
【事務局】
湯沢市佐竹町一番一号
湯沢市教育委員会事務局
教育部生涯学習課
ＴＥＬ　七三―二一六三

会員募集中です。
最寄りの会員や
事務局へお気軽に
ご連絡ください。